

本多忠勝系(岡崎・山崎・泉)

徳川譜代でも最大勢力を誇る苗字は本多である。諸侯にも八家を数えるが、旗本にも数多い。ただ、早い時代から分かれており、徳川四天王の一人本多忠勝の系統、宗家であるともいわれる膳所藩の系統、そして家康の謀臣正信の一族というように三分するとわかりやすい。藤原兼通の子孫と称する。豊後国本多郷にあったが、足利尊氏のもとで尾張の地頭となり、子孫が三河に移ったという。松平家四代目の長親のころから仕えていたらしい。

忠勝の祖父、父、叔父のいずれもが松平家のために戦死しているが、忠勝自身は五〇回以上の出陣にもかかわらず、かすり傷すら負ったことがなかった。三方が原の戦いでの退却作戦を成功させ、「家康に過ぎたるものは唐の兜に本多忠勝」と武田側の杉右近から賞されたこともある。また、堺で本能寺の異変を聞いて家康が自害しようと言いだしたのを説得したのも忠勝である。

関東平定後は上総大多喜で一〇万石を得たが、関ヶ原の戦いのあと、子の忠政に家督を譲り桑名一〇万石、次男の本多忠朝は大多喜五万石となった。忠政の妻は信康の娘である熊姫で、その嫡子の忠朝は千姫の二度目の夫である。そして、ここから江戸中期に至るまでの相続は類を見ないほどややこしい。詳しくは三〇六ページのコラムに書いたが、系図を参照しながらおおよそ読んでいただきたい。まず、一六一七年に忠政に姫路一五万石が、忠朝に千姫の化粧料一〇万石が与えられた。

忠朝は大坂の陣で戦死したが、その養子の政朝は竜野に移封後、本家を嗣いで姫路藩主となった。政勝のときに郡山に移封されたが、その死後に、養子政長と実子政信が相続を争い、結局は政長に一二万石、本多政利に明石六万石ということになった。しかし政利は治世よろしからず、陸奥大久保一萬石に左遷され、さらに侍女殺害が咎められて一六九三年に除封された。

政勝の子の本多勝行は四万石を得つつ姫路、ついで郡山に同居していたが、死去により除封。政朝の三男である本多政信は政勝の養子となって一萬石を分与されたが、政勝の五男の忠英がこれを相続して一六七九年、播磨山崎に立藩し幕末まで続いた。

一方、ご本家のほうだが、政長に子がなかったため、水戸系の松平頼元の子である忠国が郡山一二万石を嗣いだ。これが三万石を増加され福島に移封され、城を大拡張しようとしていたところ、姫路に復帰させられた。しかし、子の忠孝は幼年を理由に村上に移される。しかも、一七〇九年に忠孝が無嗣で没したので、山崎藩から忠良が養子に入ったが、五万石に減らされて、本家は小大名になってしまった。その後、刈谷、古河、浜田と移り、一七六九年に岡崎でようやく定着した。養子をあちこちから迎えたが、高松藩からの養子だった忠民は、幕末に老中をつとめた。

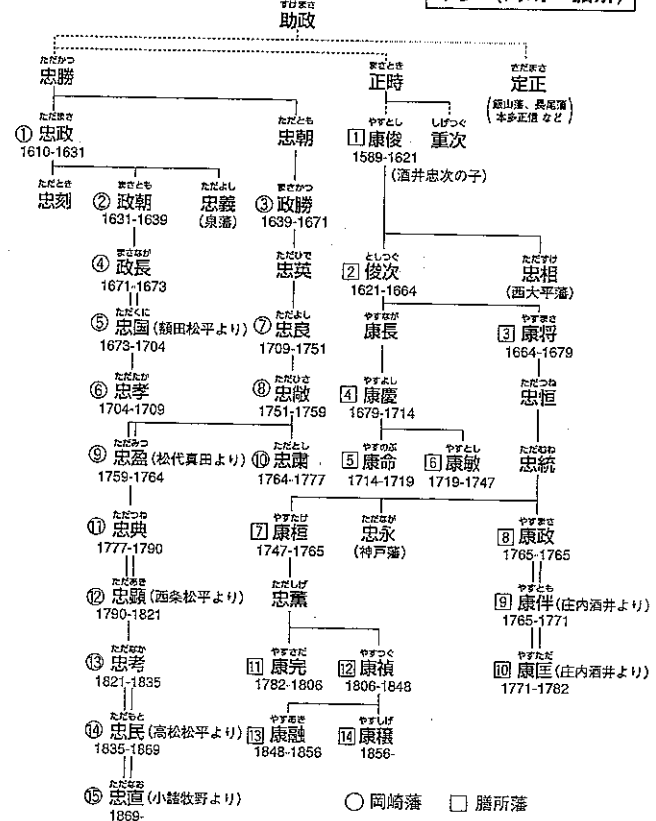
忠政の三男の本多忠義も、掛川、村上、白河と移りながら昇進し、一二万石を得た。さらに宇都宮、郡山と移り、忠烈のとき六万石に減封されたあと無嗣断絶。白河藩忠義の次男本多忠利は、寺社奉行などをつとめ、陸奥石川から挙母、相良一萬石となったが、若年寄をつとめていた三代目の忠央は、金森騒動での不手際の責任をとらされて、改易永預けとなった。三男本多忠以は、一萬石を分与されて陸奥浅川藩を創立。三河伊保、遠江相良ののち、陸奥泉に落ち着いた。同じく五男の本多忠周

コラム 本多家歴代藩主と転封

譜代大名は、ともかく頻りに転封された。なかには松平直矩(幕末には前橋藩)のように、一生で7回、殿さまとしても4回も引っ越しした殿さままでいる。ここで紹介するのは、本多忠勝を藩祖とする岡崎藩本多家の歩みであるが、9回の転封を経験している。もっとも江戸初期の場合には、引っ越しに慣れていたし、財政も豊かだったので、それほど苦痛ではなかったが、江戸後期になると、よほど豊かな土地への引っ越しでもない限り、つらいものとなっていた。

代	当主名	生没年	没年齢(数)	封地	石高	在位期間
1	忠勝	1548~1610	63歳	大多喜	10	1590~1601
				桑名	10	1601~1610
2	忠政	1575~1631	57歳	桑名	10	1610~1617
				姫路	15	1617~1631
3	政朝	1600~1638	39歳	姫路	15	1631~1638
4	政勝	1614~1671	58歳	郡山	15	1639~1671
5	政長	1633~1679	47歳	郡山	12	1671~1679
6	忠国	1666~1704	39歳	福島	15	1679~1682
				姫路	15	1682~1704
7	忠孝	1698~1709	12歳	村上	15	1704~1709
				村上	5	1709~1710
8	忠良	1690~1751	62歳	刈谷	5	1710~1712
				古河	5	1712~1751
9	忠敏	1727~1759	33歳	古河	5	1751~1759
				浜田	5	1759
10	忠盈	1732~1767	36歳	浜田	5	1759~1767
				浜田	5	1767~1769
11	忠康	1759~1777	19歳	岡崎	5	1769~1777
12	忠典	1764~1790	27歳	岡崎	5	1777~1790
13	忠頭	1776~1838	63歳	岡崎	5	1790~1821
14	忠考	1805~1879	75歳	岡崎	5	1821~1835
15	忠民	1817~1883	67歳	岡崎	5	1835~1869
16	忠直	1844~1880	37歳	岡崎	5	1869~1871

本多(岡崎・膳所)



は、寺社奉行をつとめて天和三年に足助藩一萬石となったが、その後減封されて、元の旗本に戻った。それにしても、こうした本多忠勝家の不幸は、千姫を忠朝に迎えてからのことである。忠朝と千姫の子供が成長しないことを秀頼や淀君の呪いと恐れられた千姫は、姫路の天満宮で亡夫の霊を慰めたのだが、そのかいがなかったようだ。